

# 東南アジアにおけるアフリカ系移住者

栗田和明 (立教大学アジア地域研究所所員、文学部教授)

弘末：それでは、最後の報告に入らせていただきます。本学文学部の栗田先生に、「東南アジアにおけるアフリカ系移住者」という題目でお願いいたしております。先生はアフリカをフィールドとする文化人類学者でいらっしゃいますが、最近アフリカ系移住者が東南アジアに来た事例をご研究されております。本日はその中からお話をいただけるかと思えます。では、よろしくお願いいたします。

栗田：立教大学文学部の栗田です。よろしく申し上げます。

## アフリカ人交易人の存在

東南アジア各地で多数のアフリカ人交易人が活動しています。中国、タイ、インドネシア、マレーシア、シンガポール、ベトナム、韓国、日本については、私が実際にこれらの国でアフリカ人と会って確認しました。台湾については、タンザニアでの聞き込み調査では、台湾に行くというアフリカ人交易人もいました。たまたま機会があったときに台北でしばらくアフリカ人を尋ね歩きましたが、残念ながら交易人として来ている人を私は直接確認することはできませんでした。

アジアだけでなく、世界全体でアフリカ人はよく移動しています。私の関心は交易、とくに小規模の国際的な取引に従事して、自分でリスクを取って仕事をしている人たちにあります。取引の実態、つまり何を売り買いして運搬し、仕入れと販売の価格はいくらで、どういう人が携わって、実際利益があがっているのかというところに一番関心を引かれます。しかし、今回はこの側面には触れずに、東南アジアでのアフリカ人、もう少し限定して広州でのタンザニア人のコミュニティを記述するための視角の提案をして行きたいと思えます。

## 中国＝アフリカ関係

今日のほかの先生方の発表では、1500年代に遡る発表があるなど、長いスパンで歴史を鳥瞰しています。これに対して、私の話題は基本的に21世紀に入ってから的事象です。それでも1960年代までさかのぼってみたいと思えます。現在、中国がアフリカに関与を深めていることについて、中国の資源狙い、または覇権獲得と関連づけて報道されることがあります。しかし、私の調査地のタンザニア等から見ると必ずしもそうではありません。タンザニアは1961年に独立していますが、独立時から初代大統領ニエレレがアフリカンソシャリズムを掲げ、中国の周恩来等とも強い協力関係がありました。必ずしも資源、覇権ねらいではない、理念や人道上の理由に基づく中国＝アフリカの紐帯があったと思えます。

アフリカ人、とくにタンザニア人で中国、今の中華人民共和国に長期間関係をもってきた人としては、1970年代に中国に留学して医師の免許を取ったとか、その他の技術者になったとか、という人を見つけることができます。逆に中国の人がタンザニアに関与するものとしては、目立つのは1975年完成のタンザニア＝ザンビア鉄道があります。これはタンザニアの中心都市のダルエスサラームから南西方向にザンビアのカプリムポシまで鉄道を引く難事業で、ほかの国が必ずしも乗り出さなかったのですが、中国が協力を申し出て完成させました。鉄道だけではなくて炭鉱、水田耕作でも中国の助力が広範に注がれています。これらは1960年代から1980年代の話ですが、もう少し時代を下って中国＝アフリカ関係を見ていきます。

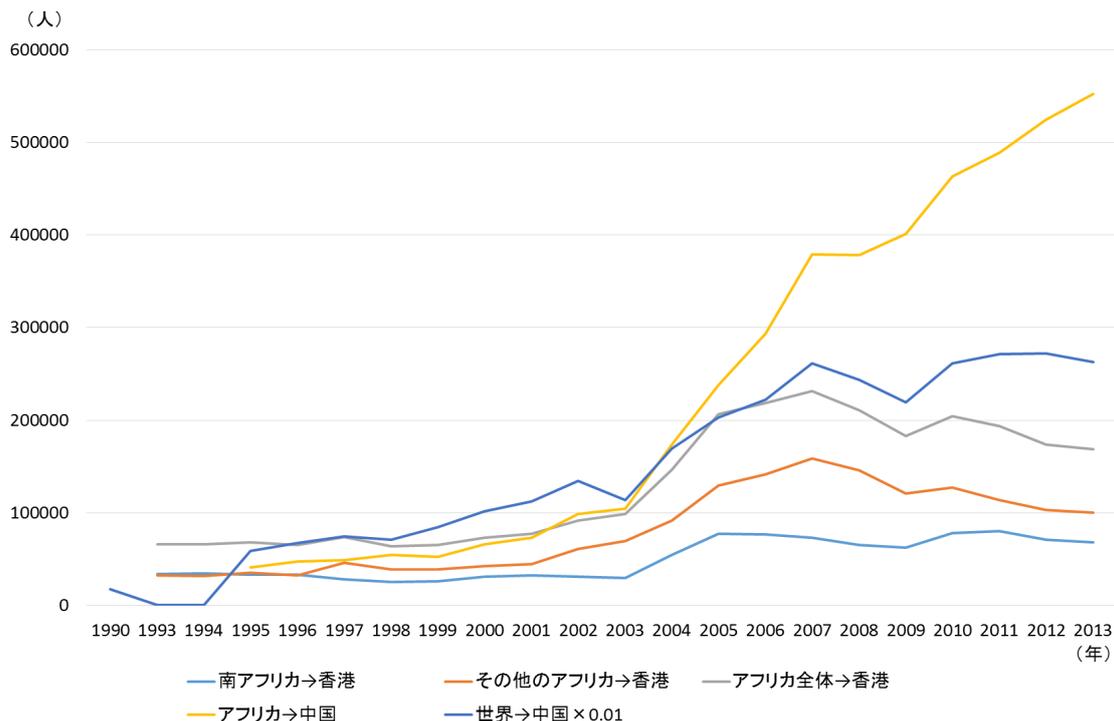


図1 中国を訪問するアフリカ人／中国統計年鑑2014, Hong Kong Tourism Board2014

## 中国を訪問するアフリカ人

中国を訪問するアフリカ人の数に注目します。図1には香港に訪問しているアフリカ人、中華人民共和国を訪問するアフリカ人の数を示しています。青色の線が南アフリカから香港に来ている人で、そのほとんど観光客です。赤色の線がその他のアフリカから香港を訪問する者です。灰色の線がアフリカ全体から香港への訪問者数になります。この3項目については、2007年にピークがあって、近年は全体としてやや下がっています。

それに対して、オレンジ色のグラフがアフリカ全体から中華人民共和国に来る人の数です。紺色のグラフが世界全体から中華人民共和国に来る数（これについてはスケールを100分の1にしてあります）です。アフリカ全体から中国に来る数ですが、全体としては伸びていますが、一時的に落ち込んでいる時期があります。これは2008年の8月に北京オリンピックが開催されたのが要因だと言われています。私も実際現地で調査していて、同感しています。オリンピックは北京で開催でしたが、中国全体に影響が広がり、2008年前後には広州でも上海でも不法滞在とおぼしき外国人について路上で呼び止めて詮索したり、アパートを訪問して滞在許可の提示を求めるといったことがおこなわれていました。

レコードチャイナのウェブサイトによると、2009年、町中で滞在許可等の提示を求められたナイジェリア人がビルに逃げこみ、最終的にはビルから飛び降りて大けがをして、それに抗議するナイジェリア人が広州で数百人集まったという記事がありました。

広州では不法に営業しているアフリカ人経営のレストランや美容室もありますが、そういったものについて中国の官権が厳しくチェックをしました。あるいは、すでに取得したビザの延長についても、厳しくなりました。ちなみに日本人も中国入国に際して15日間まではビザ不要、簡単な申請で30日間の観光ビザは取得できるはずですが、この時期には30日間の観光ビザは基本的には取得できませんでした。こうした影響もあって2008年とそれに続く2009年では、入国者数に落ち込みがあったのです。

**表1 香港に入境するタンザニア人／アフリカ人**

	アフリカ人	タンザニア人	タンザニア人の割合
2013年	168,656人	8,735人	5.2%
2007年	231,517人	14,988人	6.5%

Hong Kong Tourism board 2014

**表2 タイに入国するタンザニア人／アフリカ人**

	アフリカ人	タンザニア人	タンザニア人の割合
2007年	104,941人	3,171人	3.0%

私信

## タンザニアと中国

私はアフリカのなかでもタンザニアに関心を寄せています。そこで、タンザニア人が中国にどのくらい入っているのかを整理してみました（表1）。

香港に到着するアフリカ人は、実はだんだん減少しています。香港の場合は、入国者の国別に統計が公表されていますが、香港の統計ではエジプト人はアフリカ人の中に含まれていません。アフリカ人全体に対してタンザニア人は2013年は5.2%を占め、2007年は6.5%でした。

つぎにタイの場合を示します。これは私信で得た情報です（表2）。

タイに入国するタンザニア人の割合はアフリカ人全体に対して3.0%です。人口比から見ると、ブラックアフリカ全体の人口11億人に対して、タンザニアの人口は4,600万人で、4%を占めます。ですから、タイでみた3%、人口比でみた4%、香港でみた6.5%と小異はありますが、各地のアフリカ人入国者の3～6パーセントを、タンザニア人が占めていて当然でもあります。人口比に沿った程度の頻度でタンザニア人はアジアに出て来ていると思われる。

## 中国に居住するアフリカ人

次に、中国に居住しているタンザニア人数を推定したいのですが、的確な統計資料はありません。Bodomoという研究者が『Africans in China』（2012）で、“Africans who are in China”として表3の数を示しています。

Bodomoは『Africans in China』のなかで、“Africans who are in China”と言ったり“Africans at any given time”と表現したりしていますが、両者の違いは不詳です。これはある程度の長期間、中国に滞在している者を指すのか、あるいはこれに加えて調査時点でたまたま滞在し

**表3 “Africans who are in China” の数**

	人数	備考
trader	300,000-400,000	
student	30,000-40,000	
professional	4,000-5,000	
tourist	93,000 (2010)	
Temporary business travelers	10,000-20,000	
total	400,000-500,000	“Africans at any given time”と表現されている

ていた短期の滞在者も含めた数なのか、明示されていません。Bodomoに同情的に考えれば、そもそも前者にしても後者にしても正確な人数を求めることは難しいでしょう。滞在の期間には関わらず、およそ40~50万人のアフリカ人が中国にいと理解しておけばよいでしょう。そのうちのほとんどを交易人が占めていることも伝わってきます。

一方、Bodomoは中国人がアフリカ大陸全体に200万人ぐらいいる、としています。この数は日本でも時々報道され、200万人といわれたり、300万人といわれたりしています。こちらも正確な集計はできないわけですが、各所で見かける数字は大きくはかけ離れていません。

アフリカにいる日本人は、在留届の数で判明しており、7,000人台です。アフリカにいる中国人の200万人から300万人に比して、日本人はその数百分の一の人数です。

Bodomoの推計で中国にいるアフリカ人は40~50万人程度とされています。そのうち広東省の州都の広州に10万人程度がいるとされています。Bodomoは、ガーナ出身の方で香港の大学で研究生生活をしています。ガーナ人が調査しているので、アフリカ人コミュニティに接触しやすいという利点があったと思います。実際に、ナイジェリア人などの組織の中心者から情報収集をしています。広州のナイジェリア人は7,000人から1万人、カメルーン人は1,500人、あるいは広州のギニア人は300人程度いるとBodomoは報告しています。

これらの推計は大まかなものであることに再度ご注意ください。たとえば、日本で在留届を出している、つまり正規に外務省が掌握している滞日のタンザニア人の数は300人台です。一方、日本でのタンザニア人組織の中心者に私が尋ねると、だいたい3,000人ぐらいの人数が示されます。外務省が掌握している数と10倍も異なっています。調査者と非調査者との間の信頼関係、あるいはインタビューされた人が組織を大きく見せたい事情、なども関係してくるでしょう。あるいは中国の場合は、外国人の組織が存在することが好まれないこともある、と他のナイジェリア人に聞いたこともあります。

中国内のアフリカ人コミュニティ、あるいは一般的に移住者のコミュニティを考えていく上で、長期間の居住者と短期間の訪問者を峻別するような方法は適切であるかどうか検討する必要があるでしょう。一般に居住者は把握しやすく、居住者を中心に形成される移住者コミュニティ象が記述されてきました。しかし、居住者よりもはるかに多い数の短期的な訪問者が、じつは行き交っているのも現状です。居住者と訪問者を一括してある時点で凍結してカウントする方法がとれないか、検討を進めたいと思います。

Bodomoの成果からも一応離れて、私の調査から話題提供していきます。**写真1**は広州の町の一部の写真です。広州では場所によってはアフリカ人が非常に多いのでチョコレート色の街・区画があるということで、中国語



写真1 巧克力之城（チョコレート色の街）



写真2 天秀ビル



写真3 タンザニア人レストラン



写真4 タンザニア人の美容院

で「巧克力之城」と表現をされることがあります。写真2は30階建て、3ブロックある巨大ビルです。広州ではもっと大きいビルも多数あるので目立ちませんが、アフリカの人がたくさん集まるということで有名なところです。写真3はその中の一室にあるタンザニア人レストランで、タンザニア人がオーナーでタンザニア人交易人が広州に来るとここでタンザニア料理を食べ、商売上の情報交換をしています。写真右端に中国人らしい人が1人いますが、こうした人が例えば携帯電話のバウチャーを販売したり、換金をしたりしています。

こういったレストランはタンザニア人コミュニティの重要な中心地になっていますが、それだけではなく美容室がほとんど必ず併設されています（写真4）。とくに女性交易人が数日に1回、美容室に来て髪型を整えています。中国人経営の美容室だとアフリカ人の球状毛を扱い慣れていないので、アフリカ人がやっている美容室が繁盛しています。

表4は私がタンザニア人店舗の数を広州で数えた結果です。広州に数ヶ月滞在してタンザニア人の交易エージェント、レストラン、美容室について調べました。漏れている店舗がある可能性もありますが、大まかには実状を示していると思います。これらの店舗、エージェントの関係者は長期間、広州に定住していますが、100名プラスアルファぐらい

表4 広州でのタンザニア人店舗・人数

		2004-07年	2008年	2014年
店舗数 (店)	レストラン	2	0	3
	美容院、床屋	1	1	4
	店舗があるエージェント	2	2	2 移転
	店舗	2	0	0
人数 (人)	レストラン経営	2		
	運送関係	8		
	店舗	1		
	留学生	5		
	エージェント	10		
	合計	26		
	+家族、倉庫内での勤務、エージェント、留学生	100名程度		

**表5 タンザニア人交易人の数の推定**

推定の方法	推定の経緯
レストランの食数から	アンクルKのレストランで10000～17500食／年を調理 ↓ 3000～5800人／年が通過 ↓ 他レストラン、レストラン非利用者を勘案して 6000～12000人／年
アフリカ人入国者数より	55万人／年 ↓ 広州へ30万人／年 ↓ タンザニア人が5%として 15000人／年

の数でしかないと思います。

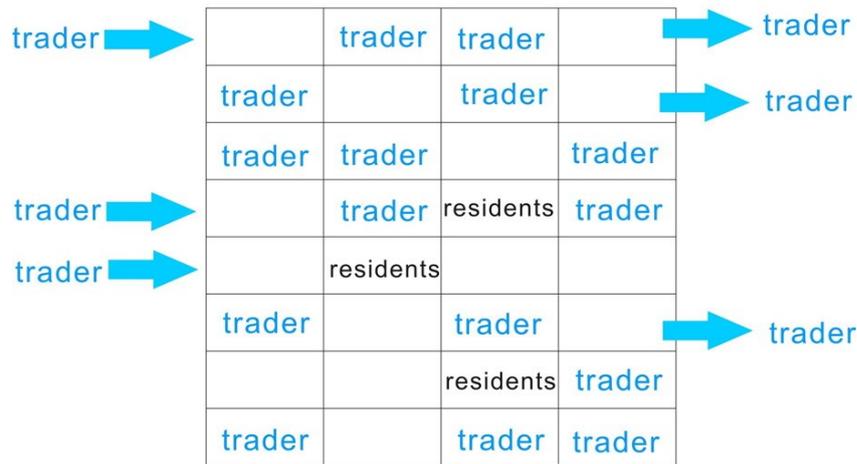
一方、広州に交易で短期間だけやって来る人の数も点検したいと思います。交易人の広州での滞在時間が短いことが特徴です。数日間しかいない。その間に発注を済ませてあとはエージェントにクリアランスと輸送を委ねて帰国してしまいます。それを1年間の間に何回も繰り返します。少ない人は1年に1回しか広州を訪問しませんが、多い人は一年に20数回来る場合があります。これは、ダルエスサラームに5日間滞在し、2日かけて中国に来て広州で5日間滞在して買い付けし、そしてまたダルエスサラームに2日かけて帰る、つまり2週間サイクルで広州＝ダルエスサラーム往復を繰り返して1年に20数回中国訪問をするのです。とくに卸売りの業者にはこういった行動が見られて頻繁な動きが特徴です。

短期滞在の交易人たちの人数の推定を試みます。**表5**は、はじめにタンザニア人レストランの中で毎日の食事数から来客数を推測しています。タンザニア人レストランは表4で示したように推定作業をした2007年には2軒だけで、多くのタンザニア人交易人が利用しています。もちろんレストランを毎食は利用しない、他レストランの利用なども勘案して推定を進めます。こうして年間6,000人から1万2,000人ぐらいのタンザニア人が広州に来ていると推定できます。

**表5**の2番目の項では、中国全体に入国するアフリカ人の数から推定をはじめていきます。中国統計年鑑で55万人がアフリカから中国に入ると示されています。そのうちの30万人程度が広州に行くとは私は推定しています。タンザニア各地、広州各地、あるいは中国のほかの場所でも、「中国での買い出し場所」をタンザニア人に尋ねました。返答は、ほとんど広州でした。まれにイウを挙げる者がおり、上海に行くという人はほとんどありません。留学生の場合は中国の各地に分散していますが、それよりも圧倒的に入国者数が多い交易人は、広州以外の場所を拠点にする人は少数で、全体の55万人の半分以上の30万人が広州へ来ると推定できます。30万人のアフリカ人の5%がタンザニア人として、1万5,000人になります。

**表5**では二つの方法でタンザニア人の広州への入域者数を推定していますが、いずれも1万人レベルです。

すでに定住しているタンザニア人は100人規模だと示したので、出入りをする、あるいは短期滞在タンザニア人の1万人規模と2桁も違っていることが特徴的です。少数の定住者と桁違いに多い通過者が組み合わさったものとして広州のタンザニア人コミュニティを見ることが妥当でしょう。広州のタンザニア人コミュニティの中に少数のレジデントがいて、そこに多くの交易人が入っては出て行く。移動を繰り返しているような、つまり安定的でない交易人の数は膨大です。これらの交易人を個別に注視すると頻繁な動きに惑うこ



**図2 African communities among Asia and Africa depending on dynamic equilibrium**

ともありますが、彼らが入り出るタンザニア人コミュニティ全体を鳥瞰的に眺めると、輪郭としては、ある一定のものが形づくられているといえるでしょう（図2）。個別の構成要素が常に出入りしつつも、器官や組織としては動的な平衡を保っているようなものです。

### Frequent Travelerがつくるコミュニティ

頻繁に移動を繰り返す人のことを私はFrequent Travelerと名前を付けています。広州でのタンザニア人のコミュニティは、少数の定住者と多数のFrequent Travelerによって輪郭が形成されています。コミュニティの中にはレストランや美容室というタンザニア人の出会いと情報交換の上で結節点となるところがあります。結節点が移民コミュニティで見られるということは、新しい知見ではなくてすでに指摘されているものです。

21世紀の移民ならではの特徴として、移動と通信の手段や料金について利便性が高まりました。こうした移動、通信、運搬を助ける手段の進歩にも支えられてFrequent Travelerが発生できます。たとえば価格の交渉にスマートフォンの電卓画面を使う。携帯電話で国外の相場を確認する。あるいは中古車売買でタンザニアの顧客と香港のエージェントの間で画像付きの資料をやりとりする。こうしたことは、ごく当たり前の行為です。移動にかかる料金についても安くなっていて、タンザニア、ケニア、あるいは南アフリカ国内からも広州まで往復しても、プロモーションにもよりますが、1,000ドルでまかなえます。買い付け用の手元資金の3,000~4,000ドルを加えて5,000ドル程度の初期費用でも、国際的な交



写真5 広州の空港



写真6 香港の中古自動車店



写真7-1、写真7-2 香港 重慶大廈



写真8 バンコクのコンゴ人



写真9 バンコクのナイジェリア人

易に参入できています。

**写真5**は広州の空港での写真です。エコノミークラスのチケットでは通常は20キロの荷物までしか運べません。しかし、複数の会社がプロモーションをしている結果、エコノミーで35キロまで運ぶこともできます。あるいは、フリークエントフライヤーとしてマイルがたまるとエコノミーでも70キロまで運べるプロモーションもあります。船、コンテナでの輸送だけでなく、航空機で買い出し品を運ぶこともまれではありません。

最後になりますが、Frequent Traveler同士は広州の結節点以外でも複数の接触点をもっていることも指摘できます。**図2**ですと、Frequent Travelerは、広州を去ると拡散して、相互の関係が薄れていくイメージを持たれるかもしれませんが。実はFrequent Travelerは広州を去っても例えばダルサラームの近所でお互いの店を構えていたり、買い付け品をダルサラームだけではなくてザンビアのムサカとかマラウイのリロングウェなどに運んで、お互いの店が近所であったりすることがあります。Frequent Travelerは広州で結節するだけではなくて、他所でも相互の関係性を持ちつつ移動していることも強調しておきたいと思えます。

最後は、時間の関係で写真だけお見せしたいと思えます。**写真6**は香港でタンザニア人交易人が中古自動車を物色しているところです。

**写真7-1、7-2**も香港で、**写真2**の広州の天秀ビルのようにアフリカ人が集まることで有名なチョンキンマンションです。



写真10 ジャカルタのタンザニア人



写真11 ルサカのタンザニア人

写真8はタイのバンコクです。ここにいる人たちは衣類の購入にコンゴから来ている人たちです。

写真9は同じくタイのバンコクです。右端はナイジェリア人でタイ女性と結婚して、バンコクで靴の卸売りをしています。

写真10はインドネシアのジャカルタで出会ったタンザニア人です。真ん中の人は20数年ジャカルタに住んでいます。最初はイスラム学校で勉強する目的で来ましたが、今は輸出業に従事しています。左の人はタンザニア人の交易人で真ん中の方のオフィスを利用しています。右端もやはりジャカルタ滞在のタンザニア人交易人です。

写真11はザンビアのルサカで出会ったタンザニア人です。写真に写っている人たちは、タンザニアではほとんど同じ村の人たちです。Frequent Travelerが他地でも接触し合っていることの一例としてお見せしました。アフリカの中での交易人の動きについては、他の機会でご紹介したいと思います。

写真12はタンザニアのダルエスサラームのマーケットで撮ったものです。左の人はタンザニア人で彼の店はザンビアのルサカにあります。タンザニアに買い出しに来ました。右の人は中国の杭州から来た人で、店をウガンダ、タンザニア、カナダに持っています。ダルエスサラームの店で、ザンビアから買い出しに来たタンザニア人と商談している光景です。



写真12 ルサカのタンザニア人と中国からの商人

## 質疑応答

**フロアA**：商売の中身までは入らないという話でしたが、あまりにも面白いご報告でしたのでぜひ質問させてください。こういったタンザニアから来る方は、どういった商売をするために来ているのかということ。それから、時代背景として70年代から中国の留学や技術支援といった関係があるというお話でしたが、これがどうして貿易や、彼らの移動やビジネスにつながったのかということについてお聞かせ頂けますか。最後に、今日の話は小規模インフォーマルトレードに焦点を当てるということでしたが、これが大層を占めると考えていいのでしょうか。それともタンザニア人のビジネスに関しては、ほかの分野も有力なものとしてあるのでしょうか。よろしくお願いします。

**栗田**：ありがとうございます。まず交易で扱う品物ですが、非常に多様です。その中で、広州で特徴的なのは衣類です。ジーンズ、Tシャツ、スカート、シャツなどが主体です。それ以外にも携帯電話、建築資材などもさかんに買い付けられています。取引人たちはタイヤ、ガラス、アルミサッシ、あるいはオートバイなど、中国で生産したものをアフリカに持って行きます。

場合によっては中国とアフリカでの売価が100倍ぐらい違うものもあります。それは必ずしもオートバイやスマートフォンなどの先端的な製造物ではなく、たとえば釘、櫛、煉瓦、ボールペンなど、シンプルな製造物で中国＝アフリカの値段の差が大きいようです。

1970年代から医師、建築家、高級官僚などになろうと中国に留学したアフリカ人は、もちろんその専門の分野でずっと生活している人もいますが、一方では、交易に携わったほうが儲かることに気付いて方向転換する人もいます。1970～80年代に中国にやって来たアフリカ人で、交易関係のエージェントになっている人もたくさんいます。

タンザニア人の交易の形態ですが、基本的にはインフォーマルセクターとして活動しています。だんだん交易の規模が大きくなってくると、親族を巻き込んで活動しています。取引の金額が大きくなっても会社組織にして俸給をもらう体制ではなく、親族を巻き込んで自らリスクを取って交易する形態が一般的です。

**フロアB**：少し政治外交に絡む文脈の質問です。われわれも北京などに行くと、非常にアフリカ人の存在感があり、中国とアフリカの絆を非常に強く感じる場合があります。日本の場合、特に国連改革の動きがきっかけになってアフリカへのアプローチを強め、TICADと言うアフリカ開発会議も5回開き、アフリカとの協力関係を強めているわけです。けれども、中国はやはり70年代からタンザニアのタンザン鉄道を建設したことで有名で、アフリカとの絆はとても強い。それと同じように日本が競い合ってもしょうがないんじゃないかと思うんですが、そういう点について先生はどう思われますか。日本はアフリカとどのように絆を強めていったらいいのでしょうか。

**栗田**：ありがとうございます。とても難しい質問で私も単純明快な回答はありません。タンザニア、マラウィ、ケニアなどアフリカ各地へ行くと日本の青年協力隊の方が村の中で少人数で地道に活動されています。これはとても大事だと思います。たとえば中国は人数の上でもプレゼンスが日本の何百倍もあります。取引や援助の金額にしても大きいものがあると思います。マラウィという国がありますが、マラウィは、独立当時から台湾政府のほうを承認していたわけですが、2000年以降になって中華人民共和国の承認に切り替えました。南アフリカもそうです。こうして、今アフリカ大陸の中で台湾政府のほうを承認している国はもう数カ国しか残っていません。中華人民共和国が様々な働きかけをして国会議事堂をつくったり、ファイブスターのホテルをつくるなど積極的な関与を続けていることが背景にあります。

私としては中国＝アフリカの紐帯が太いことは素直に評価して、日本もそれと同じ土俵で競争する必要はないと思います。一方で、先に例示したような、ミクロの現場をもつ協力隊の活動などは誇るべきものだと思います。ファイブスターのホテルや、巨大国会議事堂をつくるなどの大工事で中国の人はたくさんアフリカに来ています。彼らは基本的に工事現場に集住していて、村に出て行って村人と仲良くなって食事に招いたり招かれたりする関係を結ぶことは比較的少ないようです。日本人の協力隊、その他のアフリカ在住の人は、アフリカ人と個別の接点を育てていて、これには一日の長があると思います。

## 参考文献

Bodomo, A. 2012 *African in China: A Sociocultural study and its implications for Africa-China relations*. N.Y.: Cambria Press.

Hong Kong Tourism Board. 2014 *A Statistical review of Hong Kong tourism 2013*. Hong Kong Tourism Board.

栗田 和明 2011

『アジアで出会ったアフリカ人 ——タンザニア交易人の移動とコミュニティ——』昭和堂

National bureau of statistics of China. 2014 *China statistical year book 2014* 『中国統計年鑑 2014』 China statistical press 中国統計出版者

レコードチャイナ 広州のナイジェリア人の記事

URL <http://www.recordchina.co.jp/group.php?groupid=33456> 2015年4月23日閲覧

近世から近現代にいたる海域世界の社会統合